

第三回和辻哲郎文化賞 学術部門 受賞作

永積 洋子 著『近世初期の外交』（1990年3月15日 創文社 刊）

永積 洋子 ながづみ ようこ 昭和5年（1930）生まれ。東京都出身。専攻は、日蘭通交貿易史。東京大学文学部国史学科卒業。東京大学大学院人文科学研究科国史学専門課程修士課程修了。オランダ高等科学研究所に共同研究参加のため留学。東京大学文学部教授、城西大学経済学部教授を経て、現在は財東洋文庫研究員。著作は、訳書に『平戸オランダ商館の日記』、『コルネリス・スハーブ南部漂着記』、共著に『平戸オランダ商館・イギリス商館日記』、編著に『唐船輸出入品数一覧一六三七～一八三三』がある。

受賞のことは

思いがけなく、私にとって縁のある姫路市の和辻哲郎文化賞を受賞しまして、ありがたく、うれしく存じます。歴史学を専門にすることを迷っていたときに、ちょうど和辻哲郎の『鎖国』が評判になっていまして、私にとっての一冊の本となりました。海外との往来が不自由な時代でしたから、和辻が利用できた文献は限られていたと思います。その後、「大航海時代」という言葉が使われだして、ヨーロッパ中心の歴史から東西が対等であるという考え方に変わってきたことが、受賞作を執筆する動機になりました。私は国史学の周辺にいて思っていました、最近では周辺が認められる、ありがたい時代になってきました。今回の受賞を一番喜んでくれたのは、海外の友人たちで、対外関係史が市民権を得たといって、祝ってくれています。

※授賞式の挨拶から構成。

《選考委員評》

勝部 真長

わが国は、島国であることも手伝って、「鎖国」とか「開国」とかということが、対外関係において常に問題になりやすい。現在でも外国人労働者や難民の受入れの問題、また日米貿易交渉におけるコメ輸入の問題などで、一粒たりとも外国米は入れない、などという頑くんな態度について、鎖国的とか排外的とかいう言葉が使われる。

「鎖国」という語を初めて使ったのは、十九世紀初め、長崎の通詞であった志筑忠雄である。彼はオランダ商館の医師をしていたドイツ人博物学者ケンペルの著『日本誌』の一章を翻訳して『鎖国論』（一八〇一年）とよんだ。これ以後「鎖国」という語が一般に使われはじめ、とくに幕末に「開国か鎖国か」が、やかましく論ぜられた。

徳川幕府が、天草の乱の直後、寛永十六年（一六三九）に出した「ポルトガル船来航禁止令」によって朝鮮・明・オランダの三国以外の外国との通交は禁止され、安政元年（一八五四）の日米和親条約によって、この禁が解かれるまで、およそ二一五年間を一般に徳川の鎖国時代とよんだのである。

鎖国政策の内容は、幕府による①出入国管理、およびキリスト教禁止。②外交権の独占、③貿易統制、④海外情報の独占などであった。

和辻博士の『鎖国』は、近世初期の外交関係を扱っているが、主としてキリスト教を中心として西欧の近代精神、とくに近代科学摂取の問題をとり上げ、合理的思考と視野拡大の重要性を論じている。「鎖国とは一つの世界への動きを拒む態度である」といつている。

しかし鎖国は、島国の日本だけでなく、李氏朝鮮も中国（明・清）でも行われてきた。彼等は「海禁」といって、住民の私的な海外渡航や海上貿易を禁止する政策をとった。同時に自国を中華（文化の中心）として周辺諸国に朝貢を求める「華夷秩序」（冊封体制）が、出入国管理システム（海禁）と併行して行われた。

本書は、ちょうど和辻氏の「鎖国」に欠けていた貿易史の視点から、近世初期の外交を、豊富な内外の文献を駆使して、実証的に解明した、輝しい労作である。

家康・秀忠・家光の三代にわたる徳川政権にあつて、外交の実権は誰が握っていたか。従来明らかでなかったことを、『オランダ商館の日記』の訳者である永積氏は、オランダ資料から拝謁の形式・献上品・贈物の多寡などを手掛かりとして見事に分析している。またオラ

ンダが台湾を足場として中国貿易を中継し、日本だけでなく東アジアに手広く貿易を試みたやり方も明らかにされる。当時、生糸・絹織物がいかに必需品とされたかは、ポルトガルに代ってオランダが貿易国として交替する条件であったことから知られる。

和辻賞にふさわしい作品といえよう。

湯浅 泰雄

永積洋子氏の『近世初期の外交』は、オランダの日本関係史料についての長年の着実な研究をふまえ、家康から家光に至る江戸初期日本の外交の状況を、外国から見た眼を通して生き生きと描き出した作品です。専門家の間でも高い評価を得ているものですが、もっと一般的な立場からみても、新鮮な魅力を感じさせられます。三代の将軍をはじめとする当時の幕府の有力者たちが、歴史の中から生きてよみがえってきたような姿を現わします。オランダ人が情報網をはりめぐらせて日本の政界の状況を適確にとらえていたことにはおどろきま。将軍への拝謁や国書の形式の変化の様子などは、当時の日本人の考え方をまざまざと感じさせてくれます。後半には、オランダの台湾貿易を中心にして、当時の東アジア・東南アジア地域における西洋諸国と中国・日本などをめぐる外交・貿易・戦争などの状況が展開されています。私たちが、今まで全くと言っていいくらい知らなかった、この時代のアジアの国際状況が知られて興味はつきません。

和辻哲郎に『鎖国』という作品があります。これは主に戦国時代の日本をあつかったものですが、ポルトガルの宣教師などの史料を使って、外国から見た日本の状況を、当時の国際関係にもとづいて生き生きと描き出しています。永積氏の研究はこれより少し後、いわゆる「鎖国」の体制ができ上る直前の日本を対象にしたものですが、これまで単純に鎖国とよばれていた当時の複雑な状況がくわしく明らかにされています。日本の歴史は、従来ともすれば日本の内部だけの完結した形で描かれる傾向があったように思いますが、外からの複眼的な見方を通して見直すことによって、日本の新しい素顔が見えてきます。永積氏の著作は、学術的業績としての重厚な内容のみならず、日本の歴史に対する新鮮な見方を切りひらいたという点で大きな功績のあるものと信じます。受賞作としてこのようなすばらしい作品を得たことを喜びとする次第です。

坂部 恵

この書物は、オランダ語のものをはじめとする内外の諸一次資料の長年にわたる着実な研究の積み重ねの上に立って、従来経済史、政治史、キリシタン史等の限られた問題視角からのみ見られがちであった十七世紀前半元和、寛永期の日本の対外関係史にひとつの総合的な見直しを与えようとする画期的なところみであり、和辻哲郎がその豊穡さを顕揚したひろい意味でのフィロロギー（文献学）のもたらしうる実り豊かさをまれに見るほど見事に示したひとつの成果であるといつてよい。第一部では、徳川政権初期の日本外交政策の意志決定のプロセスが組織と個人の両面から多くの資料を駆使しつつ詳細に浮き彫りにされ、第二部では、拝謁や国書の形式といった儀礼が対外的な権力関係の場で帯びる具体的な意味と機能とが、歴史学の新らしい研究動向をさりげなくしかし着実に踏まえながら、いわば〈解釈学的〉に取り出され、時代の動向の政治経済的な総体のなかへと積分される。第三部では、一転して、中国、オランダ、日本の三つ巴の経済関係のなかにおける台湾の占める位置が、冒険商人の動向等をなまなましくからめつつオランダ史料によってあきらかにされ、当時の対外関係と政策の経済的基盤の具体相が示されるとともに、後世の領土概念、制度概念などを無意識のうちに投影して歴史を見ることの危険がおのずから明示される。

以上三部の考察をまとめて、著者は、寛永十年から十六年にわたる一連の統制令、禁止令のおおまかな理解にもとづく従来の日本史学における「鎖国」体制にないし「鎖国」概念についての誤解を根本のところから訂正することを提唱する。この研究でむしろ意識的に視野の正面から外されている文化史への着実なインパクトが示唆されるのである。ここから出発して、「鎖国」や「開国」といった近世から近代の日本の歴史を見る際に従来ほとんど自明の枠組として使われていた概念をあらたに根本のところから〈脱構築〉し、たとえば、キリシタン禁教や廃仏毀釈がそれぞれの時代においてもった意味やあるいは後世に及ぼした得失についてまったくあらたな対外関係の視野のなかで考えなおすことは、今後の歴史学にとって魅力ある課題となることだろう。